

## 三角ロジックを活用した国語科授業実践 —根拠のある考えの形成を目指して—

教職実践専攻・学校教育実践コース

学籍番号 22GP202 氏名 新田 ひかり

### 1 はじめに

平成 28 年公表中央審議会答申において、中学校国語科の課題として『全国学力・学習状況調査の結果によると、(中略)中学校では、伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、(中略)文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている』<sup>1)</sup>と述べられている。これを踏まえ平成 29 年告示中学校国語科学習指導要領では、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のすべての領域で「根拠を明確にして考えること」が指導事項として明文化された。このように、現在国語科教育では「根拠のある考えの形成」が解決すべき重要な課題として強く示されている。また、上記の指導事項は国語科に限らず様々な教科で導入されていることから、「根拠のある考えの形成」は学校教育全体で課題意識がもたれ、解決が求められていると予測できる。これを踏まえ、本研究ではこの課題を解決するために、「根拠のある考えを形成する」ことを目指した授業実践を行うこととする。

### 2 研究概要

(1) 中学校国語科における「根拠のある考えの形成」に関わる指導事項に関して

平成 29 年告示国語科学習指導要領では、育成を目指す資質・能力について「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で示している。そのうち「根拠のある考えの形成」に関わる指導事項を表 1 に整理した。

**表 1 「根拠のある考えの形成」に関わる指導事項**

知識及び技能		
○情報の扱い方に関する事項：情報と情報との関係 (第 1 学年)ア 原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解すること。 (第 2 学年)ア 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解すること。		
思考力・判断力・表現力等		
A 話すこと・聞くこと	B 書くこと	C 読むこと
○構成の検討・考えの形成 (第 1 学年)イ 自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考えること。 (第 2 学年)イ 自分の立場や考えが明確になるように、根拠の適切さや論理の展開などに注意して、話の構成を工夫すること。	○考えの形成、記述 (第 1 学年)ウ 根拠を明確にしなが、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。 (第 2 学年)ウ 根拠の適切さを考えて説明や具体例を加えたり、表現の効果を考えて描写したりするなど、自分の考えが伝わる文章になるように工夫すること。	○精査・解釈 (第 1 学年) エ 文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えること。

以上の指導事項から、第 1 学年・第 2 学年では「**根拠を明確にして考えを形成する力**」「**根拠の適切さを考える力**」が育成すべき資質・能力として求められていることが読み取れる。では、これらの資質・能力を育成することによりどのような成果が目指されているか

るのか。表1では示されていないが、第3学年A話すこと・聞くことのイにおいて、「自分の考えや立場を明確にし、相手を説得できるように」と明記されている。このことから説得力のある考えの形成が求められていると解釈できる。これらから、中学校国語科における3年間の学習を通して上記の力を育成することにより、適切な根拠をもった説得力のある考えの形成が成果として目指されていると推測できる。

## (2) ツールミン・モデルについて

上記を踏まえ、本研究でまず着目したのが「ツールミン・モデル」<sup>2)</sup>である。ステイブン・ツールミンが著書『議論の技法』の中で提唱した「論証のレイアウト」が、その後「ツールミン・モデル」と呼ばれるようになり広まったもので、他者に正当化できるような妥当性のある主張を構築するモデルであると読み取れる。日本の国語科教育においては、2000年代から強い関心が向けられるようになり、現在でも三省堂の中学校国語の教科書に、ツールミン・モデルを基盤とした論証モデルが示されている。ここでは「相手の主張の正しさを確かめたり、自分の主張をより説得力のあるものとしたりする」モデルとして示されていることから、国語科においてツールミン・モデルは説得力のある考えを形成するモデルとして実践する価値のあるものと捉えられていることが分かる。これらの特徴から、ツールミン・モデルを活用することにより、国語科で求められている「適切な根拠をもった説得力のある考えの形成」を達成することができると予測した。では、3年間の学習を通してツールミン・モデルを活用し上記の目標を達成するためには各学年でどのような指導が必要であるのか。本研究では、配属学年である第2学年の三省堂中学校国語科年間指導計画及び学習指導要領を確認し、指導順に整理した。

## ① 「適切な根拠」について理解する

(2) 情報の扱い方において、「意見と根拠との関係を理解するとともに、判断や考えを示す意見を裏付けるためのより適切な根拠の在り方を理解することが求められる」と説明されている。ここでいう適切な根拠とは、A話すこと・聞くことのイから「自分の立場や考えを支えるものとしてふさわしい根拠」と定義づけることができる

② 他者の意見と比較することによって根拠の適切さを吟味する。

③ 根拠の適切さに注意しながら、自分の考えを形成する。

Aエにおいて、「同じ考えであっても異なる根拠を用いたり、異なる考えであっても同じ根拠を用いたりしていることなどに気付きながら、自分の考えをまとめることが重要である」と説明されている。異なる考えであっても同じ根拠を用いている場合その整合性を確かめるためには、なぜその根拠が自分の意見を支えるにふさわしいといえる

表2 「根拠のある考えの形成」に関わる教材について

月	単元名	評価規準
5	グループディスカッション	・知識・技能(2)ア 意見と根拠、具体と抽象など情報と情報との関係について理解している。 ・思考・判断・表現(Aエ) 「話すこと・聞くこと」において、論理の展開などに注視して聞き、話し手の考えと比較しながら自分の考えをまとめる。
7	短歌・俳句	・思考・判断・表現(Bウ) 「書くこと」において、根拠の適切さを考えて説明や具体例を加え、(中略)自分の考えが伝わる文章になるよう工夫している。
9	プレゼンテーション	・思考・判断・表現(Aイ) 「話すこと・聞くこと」において、自分の立場や考えが明確になるように、根拠の適切さや論理の展開などに注意して話の構成を工夫している。
10	私の「枕草子」 「徒然草」	・思考・判断・表現(Bア) 「書くこと」において、集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にしている。

のか，その理由を説明する必要性が出てくる。これらから，根拠の適切さを吟味するときには，示されている根拠だけでなく，上記で述べた理由も吟味し，自分の考えを形成することが求められている。

④根拠の適切さに注意して話の構成を考え，文章にする。

①～③を踏まえ，自分の立場が明確になるように，適切な根拠に注意しながら話を構成し，発表したり文章にしたりする。

⑤異なる立場や考えを想定しながら，自分の考えを明確にする。

Aアにおいて，「自分とは異なる立場や考えの聞き手がいることを踏まえ，聞き手から反論されたり意見を求められたりすることを具体的に予想する」という説明がある。この評価規準は年間指導計画では省かれていることから，①～④の学習過程によって身に付けた「根拠の適切さを考える力」を応用する学習として設定することが適切であると予測した。第2学年では，①～⑤の流れによって適切な根拠について理解し，他者との比較により根拠の適切さを吟味するための考え方の定着を図る。

上記をトゥールミン・モデルと照らし合わせると，第2学年ではトゥールミン・モデルの中でも「事実・論拠・主張」の部分に着目し指導する必要性があると予測できる。そこで，着目したのが鶴田清司の「根拠・理由・主張の三点セット」である<sup>3)</sup>。

(3) 鶴田清司「根拠・理由・主張の三点セット」

図1は，鶴田清司が根拠・理由・主張の三点セットとして示しているツールである。

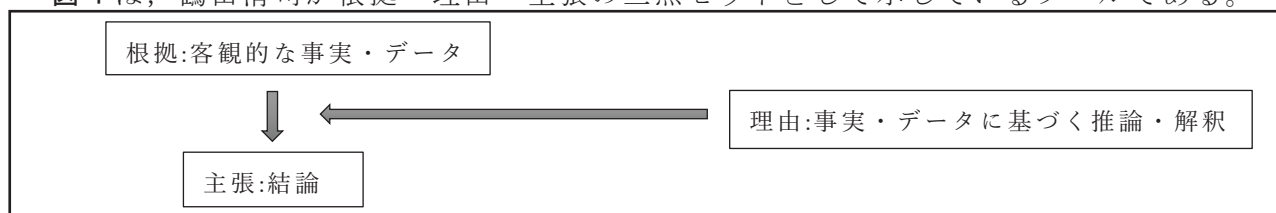


図1 鶴田「根拠・理由・主張の三点セット」

出典：鶴田清司(2017)『論理的思考・判断力を育てる三角ロジック』

鶴田が「根拠・理由・主張の三点セット」と呼んでいるツールは，通常「三角ロジック」と呼ばれている。これは，論理的思考・表現のツールであり，トゥールミン・モデルに由来するものである。鶴田は「根拠・理由・主張の三点セット」における「主張」とは結論であると述べている。指導事項の言葉に置き換えると，自分の意見や考えと言い換えることが可能である。次に，「根拠」とは誰が見ても明らかな証拠資料のことを指すと述べている。最後に，「理由」とは根拠として示している事実やデータがなぜ主張を支えることになるのか，どうしてその証拠資料からその主張ができるのかを説明するものであると述べている。依拠する証拠資料を詳しく吟味し，なぜそのデータを選んだのかその確かさを自分の言葉で説明（理由づけ）することにより，その主張は妥当性や説得力のあるものとなると述べている。このような鶴田の考えは，前述した国語科において育成すべき資質・能力及び達成すべき目標と合致している。また，鶴田は他者との対話を重要視している。自己の意見を明確にするだけでなく対話することによって，自己の思考を広げ意見をより確かなものとすることを目標としている<sup>4)</sup>。これは指導事項で求められていることと合致している。以上が，鶴田の「根拠・理由・主張の三点セット」を用いる動機である。

3 研究仮説

根拠のある考えの形成に関わる指導として，三角ロジックを活用した授業実践を行うことで，全員が適切な根拠をもった説得力のある主張を形成できる。

#### 4 昨年度の取り組み

鶴田「根拠・理由・主張の三点セット」を活用した授業を行うにあたり、ルーブリックを作成した。表3は、小学校国語科学習指導要領及び中学校国語科学習指導要領をもとに作成したルーブリックである。

表3 ルーブリック

	主張・根拠	主張・根拠	主張・根拠・理由付け	反証	トゥールミン・モデル
1 主張及び根拠の概念を正確に理解していない。 (概念理解)	2 根拠・主張の概念や関係性を正確に理解している。 (概念理解)	3 根拠のある主張を形成し、書くことができる。	4 根拠の適切さに注意して、自分の主張を書くことができる。	5 異なる立場や考えを想定しながら、自分の主張を明確にすることができる。	6 妥当性及び説得力のある主張を形成し、書くことができる。

中学校国語科学習指導要領第1学年「中学校ではまず、『根拠』という概念があることを理解した上で」と示されていることから、概念理解の有無を評価基準の第1及び第2段階に設定した。第3段階は、第1学年(2)情報の扱い方のア、B書くことのア、C読むことのエを根拠とする。第4段階は第1学年C読むことのア、第2学年(2)情報の扱い方のア、A話すこと・聞くことのエを根拠とする。第5段階は第2学年A話すこと・聞くことのアを根拠とする。第6段階は、第3学年A話すこと・聞くことのエ、B書くことのエを根拠とする。以上6つを評価の観点として設定した。

#### 5 今年度の取り組み

##### (1) 実習対象及び実習日

弘前市立A中学校2学年1クラス29名を対象にプレテスト及び授業実践を行った。実施日は5月5日、6月29日、8月28～31日、12月4～7日であった。

##### (2) 実践内容

はじめに、実態と研究目的の整合性を確かめるため、5月5日にプレテストを実施した。プレテストの結果、第1段階に該当する生徒は29名中17名、第2段階に該当する生徒は29名中4名、第3段階に該当する生徒は29名中1名、第4段階に該当する生徒は29名中6名、欠席者1名であった。この結果から、中学校国語科における課題と実習校の課題は一致していることが分かった。これを踏まえ、鶴田『根拠・理由・主張の三点セット』を用いた実践を行った(表4)。

##### (3) 授業実践

表4 各授業における評価課題の内容

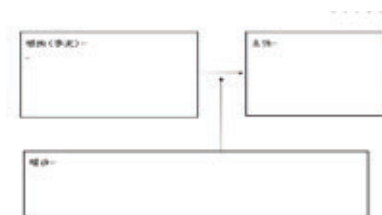
授業回	「三角ロジック」による実践
前期実習 (6/29) 欠席者1名	◎単元名：論理的に考える ①【あなたは傘を持っていきますか？】 ②【6月は春/夏？】 ③【鬼退治の時、一番強かったのはサル？鳥？キジ？】 ④【幸福の王子は幸福か/幸福ではないか？】 4つのテーマについて意見形成を行う。



集中実習 (8/28~31) 未提出者 3名 欠席者 2名	◎単元名：複数の情報を関連付けて考えをまとめる 資料①共生社会に関するグラフ（近所付き合いの変遷，人口ピラミッド，バリアフリー化の推移），資料②「自立とは依存先を増やすこと」の学習を踏まえ，テーマ「共生社会の実現に向けて大切なこと」について三角ロジックを用い主張形成を行う。
後期実習 (12/7~4) 未提出者 1名 欠席者 1名	◎単元名：論説文 テーマ：「クマをこれからも駆除し続けるべきである」 主張：賛成/反対                      根拠：資料から読み取る

(4) 評価方法

全授業で右の形を用いて主張を形成させた。前期実習はICT，集中及び後期実習は紙のワークシートに示した。



(5) 前期実習・集中実習

**結果と考察** 各授業回の結果の比較において，プレテスト後から第1回の授業実践後の過程で，向上した生徒は28名中13名，下降した生徒は28名中4名(④から①が1名，④から②が1名，②から①が2名)であった。変わらなかった生徒は28名中11名おり，①から①が7名，④から④が4名であった。第1回授業実践後から第2回の授業実践後の過程で向上した生徒は24名中7名，下降した生徒は24名中4名(④から①が1名，④から③が1名，③から①が1名，②から①が1名)であった。変わらなかった生徒は24名中12名おり，①から①が4名，④から④が8名であった。

表5 評価の観点と結果(欠席者及び未提出者を除く)

評価の観点	プレ	前期	集中
①主張及び根拠の概念を正確に理解していない。	17名	10名	7名
②根拠・主張の概念や関係性を正確に理解している。	4名	2名	0名
③根拠のある主張を形成し書くことができる。	1名	3名	3名
④根拠の適切さに注意して，自分の主張を書くことができる。	6名	13名	14名

総合的に見ると，全体的に向上した生徒が多く，三角ロジックの効果は見えた。しかし，授業実施前（プレテスト時）と比べ，下降した生徒も複数見られた。それらの生徒を分析した結果，下降した生徒は「根拠及び理由の概念理解は不十分であるが，なんとなく適切な根拠をもった主張を形成することができていた生徒」であることが分かった。

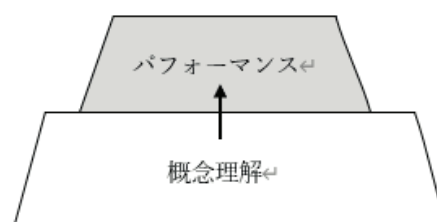


図2 プレテスト実施以前(実態把握前)

私は，ルーブリックの作成にあたり，概念理解を初段階に設定した。なぜなら，学習指導要領にも記載されているように概念理解の上にパフォーマンスがあると考えたからである(図3：灰色の部分)が，適切な根拠をもった説得力のある主張を形成できる生徒)。主張を支えるものとして「根拠」と「理由」という概念があることを知る。この概念を理解した上で，教材に照らし合わせ具体的に考える。これにより適切な根拠をもった説得力のあ

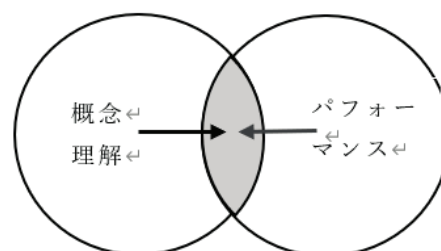


図3 授業実践後(実態把握後)

る主張を形成することができる、というように、概念理解という土台がなければ自身の目指す到達点には到達できないと予想していた。しかし、この予想に反し、上記で述べた「根拠及び理由の概念理解は不十分であるが、なんとなく適切な根拠をもった主張を形成することができる生徒」が複数人存在した(図3)。

この背景には「理由」という概念の捉え方が深く関わっていると考える。小学校学習指導要領国語編において、主張を支えるという性質をもつ概念として「理由」と「事例」が示されている。この2つは同じ性質をもっているが、互いに独立する異なる概念として示されており、理由はなぜそのような考えをもつのかを説明するもの、事例は考えをより具体的に述べるために挙げられた事柄や内容、事実と解説されている<sup>5)</sup>。この「事例」が中学校学習指導要領では、「根拠」の一つとして示され、考えを裏付ける確かな事実や事柄と解説されている。このように理由と根拠は異なる概念であるが、中学生の言語生活の中で、この2つの概念の違いを明確に意識しなければ困るという場面はほとんどないため、同じ性質をもち日常生活でも頻繁に用いられることが多い「理由」という概念に根拠が内包される傾向があると予測した。これにより、上記の生徒の姿が見られたのではないかと考えた。これを踏まえ、生徒の実態をより具体的に把握し指導方法を具体化していくため、ルーブリックを変更することとした(表6)。

表6 新ルーブリック

	A	B	C
①主張形成に関する評価	発問に対する適切な根拠のある主張を形成し、書くことができる。	発問に対する主張を形成することができる。	発問に対する主張を形成することができていない。
②三角ロジックの概念理解に関する評価	三角ロジックの概念を正確に理解している。	三角ロジックの概念を一部理解できていない。	三角ロジックの概念を理解していない。

自身が目指す生徒像として構想した「適切な根拠をもった説得力のある主張を形成することができる生徒」を育成するためには、主張を支える概念をしっかりと理解し、意識してそれらを活用する思考を培うことが必要不可欠であると考え。実態として見えた「なんとなくできる」には、いつできなくなってしまうかわからないという不安定さや、意識していないからこそ忘れてしまったり、正確に理解していないからこそ間違えてしまったりする可能性が高いという欠点、そして確実な定着が図られないため必要時に活用することができないというリスクも含まれる。だからこそ、正確で確実な概念理解の定着が図られているかを評価基準として設定し、重きをおいて指導するべきであると考え、従来の観点であった①主張形成に関する評価に加え、②三角ロジックの概念理解に関する評価を観点として設定した。また、評価はABCとし、A模範的、B標準、C要改善と設定した。

新ルーブリックに則り集中実習の成果を分析した結果、表7となった。正確に概念を理解し、適切な根拠をもった説得力のある主張を形成することができた生徒は14名、概念理解が曖昧であるため、主張は形成できたが説得力が低い主張となった生徒が8名、概念は理解できていないがなんとなく適切な根拠をもった主張を形成することができた生徒が2名、未提出者が3名であった。概念理解がBまたはCに該当している生徒を分析した結果、やはり全員根拠と理由の概念理解に困難があり、混在している生徒が多かった。

表7 新ルーブリックにおける結果

① \ ②	A	B	C
A	14名	2名	
B		7名	
C		1名	3名 未

**実践上の成果と課題** ここまでの三角ロジックの指導を通して、予想していなかった生徒の実態と、三角ロジックの効果と不完全な面を把握することができた。これを踏まえ、後期実習では三角ロジックを基盤とした効果的な指導工夫及び指導改善を探究していく。三角ロジックをただ指導するだけでは半数の生徒しか到達点に達することができなかつたからこそ、三角ロジックの活用に並行してどのような指導法や指導形態を講じることが効果的であるのかを探究していくことで、「全員が適切な根拠をもった説得力のある考えを形成できる」という研究仮説の達成を目指す。

(6) 後期実習

上記を踏まえ、以下の5つの指導工夫を実践した。

- ①テーマは生徒の日常生活に関連のあるものを設定する。  
背景：前時、テーマが難しく主張を形成する段階で困り感を抱える生徒が複数いたため。
- ②根拠は数値データと文章で述べられた事実を用いる。  
背景：集中実習の際、根拠を文章のみ用いたところ混乱したり根拠を抜き出すことに苦戦したりしていた生徒がいたため、2種類準備し考えやすい方を選択できるようにした。
- ③UDの視点
  - ・机間支援：支援の必要がある生徒（AAではなかった生徒※）全員に机間支援を行う。
  - ・見本を見せる→賛成・反対の立場から各3人ずつ板書させ、発表および共有させる。
  - ・対話や共有する時間を20分以上設ける。
 背景：学力差が大きく、生徒の実態が様々であるため。
- ④賛成/反対に分けて座らせる。  
背景：異なる立場がいることを実感させることで、説得する意欲や目的意識を強める。
- ⑤概念説明を再度わかりやすい言葉を用いて行う。  
根拠：「資料のどこから主張を考えましたか。その箇所や文をそのまま抜き出して。」  
理由：「根拠からなぜ賛成/反対と考えましたか。」  
「例えばどんな問題が予想される？逆にどんな良いことが予想される？」  
背景：概念理解が曖昧な生徒が複数存在するため

※AA…集中実習で①主張形成に関する評価がA、②概念理解に関する評価がAであった生徒。以降上記のように省略して示す。

**結果** 後期実習の成果を分析した結果、表8となった。正確に概念を理解し、適切な根拠をもった説得力のある主張を形成することができた生徒は24名、概念理解が曖昧であるため、説得力が低い主張となった生徒が1名、概念は理解できていないがなんとなく適切な根拠をもった主張を形成することができた生徒が2名、未提出者が1名（CCに該当）であった。

表8 評価の観点と結果

① \ ②	A	B	C
A	24名	2名	
B		1名	
C			1名

**実践上の成果** 今回の結果を集中実習の結果と比較すると、向上した生徒は28名中12名、下降した生徒は28名中0名、変わらなかった生徒は28名中16名（AA→AA14名、BB→BB1名、未→未1名）であったことから、実践した指導工夫は効果的であったと推測できる。

今回の授業実践では、特に3人の生徒に焦点を当て指導工夫を重視して行った。3人の生徒の実態は以下の通りである。

●Kさん：プレ（BC）→前期（BC）→集中（BB）と結果が低い生徒。勉強が苦手である、と公言していた。

【国語の実態】得意→話すこと，苦手→書くこと・聞くこと

●Nさん：プレ（CC）→前期（CC）→集中（未提出）と結果が低い生徒。国語が苦手であると公言していた。

【国語の実態】得意→話すこと，苦手→書くこと・聞くこと

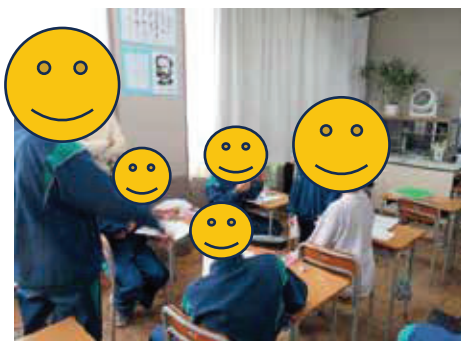
●Sさん：プレ（CC）→前期（BC）→集中（BC）と結果が低い生徒。概念理解がCで維持されている状態。学習内容への興味・関心の高低によって意欲が大きく変化する。

【国語の実態】得意→話すこと，書くこと，苦手→際立って困り感のあるものはない。

まず，Kさん・Nさんに関して。指導工夫として特に意識したのは③である。どちらも話すことが得意であり，他者と話すことでヒントを得，考えを深めることができるという実態がある。しかし，話したことを文字として言語化する（書くこと）に強い苦手意識をもっている実態もある。そのため，話し合いの場面を30分設定し20分間で話し合いをさせた後，残り10分間で文字として言語化するための机間支援を行った。机間支援の方法はまずどのような話し合いを行いどう思ったのかを話すことによってまとめさせた。次に話したことを書くよう促した。書くことを促した当初は，「何を書けばよいかわからない」「書くのが難しい」と発言したため，1要素ずつ（主張→根拠→理由）丁寧に話したことを振り返らせたり言葉を補ったり，肯定的な声掛けを積極的に行った。また，該当生徒と話し合いをしていた生徒に，該当生徒と同時に書き進めるよう促し互いに見せ合いながら書き進めさせた。次に，Sさんに関して。指導工夫として特に意識したのは①③④である。Sさんは意欲の振り幅が教材によって大きく変化する，興味のない教材であると参加しないまたは書かないという選択をとる実態があるため，テーマの候補を3つ用意し興味のあるものを選択させた。その結果「クマの殺処分」を選んだため，授業のテーマとして設定した。また，日常生活での関わりの中で，「現在の席は話せる人が少なくペアワークやグループワークをしづらいため，仲のいい人とやりたい」という発言があった。加えて，授業観察を通して，討論やグループディスカッションの場面で意欲が向上する実態を捉えた。これを踏まえ，話し合い活動の際，賛成／反対の立場で席を分けその中で自由に話し合わせたり，異なる立場の意見を聞く場面を設けたりした。最後に，3人に共通して「概念理解が曖昧」という課題があるため，②⑤の指導工夫を全体に行った。

このように生徒の実態に応じて指導工夫を選択し実践した結果，Kさん・NさんはAAに，SさんはABに向上した。この結果からも指導工夫が効果的であったと推測できる。

**実践上の課題** 研究仮説「全員が適切な根拠をもった説得力のある考えを形成できる」を達成できなかったことが課題である。到達できなかった4人の生徒を分析した結果，以下の実態が見られた。





- A B (2人)：根拠と理由の概念理解が曖昧であり，理由に根拠も含めて書いている。
- B B (1人)：理由が根拠に紐づいていない。
- C C (1人)：話し合い活動では意見を深められていたが，書くことができなかった。

本授業では三角ロジックを用いて説得力のある主張を形成した後，論説文として文章化した。文章化する前に，主張・根拠・理由のそれぞれに用いる文頭表現を指導した。

A Bに該当した2人の生徒は，どちらも三角ロジックで表したワークシートを見ると，理由に根拠が含まれていた。しかし論説文では根拠の文頭表現として指導した言葉に続いて根拠のみを書き，理由の文頭表現として指導した言葉に続いて理由のみを書くことができていた。またB Bに該当した生徒も，三角ロジックで表したワークシートを見ると，根拠と理由を紐づけるための言葉が足りず，互いに独立してしまっていたが，論説文では足りなかった言葉を補い，主張を支える適切な根拠及び理由を書くことができていた。

私は，この変化の鍵は「文章化」にあると考える。文章化が，各要素の概念について再度考え直す機会となり，自身の主張が論理的であるかを意識させるきっかけになったのではないかと推測した。

最後に，C Cの生徒に関して。C Cに該当した生徒は話し合いの場では自身の考えを根拠や理由を含め話すことができていた。しかし，それをワークシートに書くよう促しても「何を言ったか覚えていない」「書き方が分からないし，書きたくない」と話し，最後まで書いていなかった。この原因は指導工夫の不足にあると推測する。成果で挙げたKさん，Yさんも同様の特性をもっていたが書くことができたのは話したことを振り返り情報を整理する力をもっていたからだ。しかし，C Cの生徒はこの特性に加え上記の力が身につけていなかった。そのため，録音させたり文字起こしのツールを用いたり，情報を整理するための指導工夫を行った後，文章化するといったスモールステップでの指導が必要であった。これを踏まえ，指導工夫についてさらに探究を深めていく所存である。

## 6 実践上の成果と課題

本研究では，根拠のある考えの形成に関わる指導として，鶴田「根拠・理由・主張の三点セット」を用いることで，適切な根拠をもった説得力のある主張を形成することを目指した授業実践を行った。実践の結果は表9・10の通りである。この結果から，三角ロジックによる実践は効果的であったといえるのではないかと推測する。また，後期実習の結果を踏まえると，国語科においては三角ロジックをただ指導するだけでは最適な方法とは言えず，三角ロジックを活用し指導工夫を施しながら「文章化する」ことが，適切な根拠をもった説得力のある考えを形成するための最も効果的な方法であるということが明確になった。

一方で，根拠として示した教材に関して課題が残った。プレ～集中実習の成果と，後期実習の結果の比較において，これほど向上した要因は指導工夫にあるが，その中でも②根拠は数値データと文章で述べられた事実を用いた，という指導工夫が大きく影響していると推測する。

表9 主張形成に関する評価

	A	B	C
プレ	15名	7名	6名
前期	18名	8名	2名
集中	17名	7名	3名
後期	26名	1名	1名

後期実習以前の授業では文章を根拠の材料として示していたが、文章を事実・データと捉えることに困り感を感じ、根拠を抜き出せない生徒が複数存在した。そのため、今回は文章材料に加え数値材料も準備した。その結果、困り感を感じることなく適切な根拠を抜き出した生徒が増えた。この実態から、前期実習から文章材料を用いてしまったことは、生徒にとって困り感や苦手意識を与えるきっかけになってしまったように思う。これを踏まえ、今後三角ロジックを活用した授業を実践する際は、「事実・データ」に関する既存知識として身につけている傾向の高い数値材料から実践することによって、困り感を感じることなく概念理解および主張形成の方法を身に付けさせたい。そして発達段階や実態に応じ、数値材料のみ→数値材料+文章材料→文章材料のみとスモールステップ式に発展させていく。

表 10 概念理解に関する評価

	A	B	C
プレ	9名	7名	12名
前期	17名	5名	6名
集中	14名	8名	5名
後期	24名	3名	1名

## 7 実践研究の成果と課題

本研究を通して、三角ロジックが手段として効果的に働くためのプロセスが具体的に明確になった。三角ロジックそのものの指導が「根拠のある考えの形成」に常に効果的に結びつくとは限らず、その過程で「UDの視点を取り入れた指導工夫」及び「文章化」というプロセスを踏むことによって、効果が表れる範囲が格段に広がるようになった。もちろん、このプロセスが有効に働くかどうかは実態に左右される可能性は十分にある。しかし、本研究の結果を見ると有効な具体例の一つとして示すことができるのではないかと。

また、「書くこと」による言語化に至るまでの経路について多様な見取りを得ることができた。研究を通して、書くことによって言語化する能力が初めから身につけている生徒もいれば、話すことに関わる指導の充実が書くことにつながる生徒もいた。また、単に「話す」ことはできるが、話したり聞いたりした情報を整理し言語化してまとめることができず「書くこと」につながらなかった生徒もいた。この見取りは国語科の授業の土台になると考える。「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」は互いに作用する性質をもっているからこそ、国語科の課題として指摘される「書くこと」に関わる能力を向上させるためには、「話す・聞く・読む」能力の総合的な充実が必要条件になることが明確になった。一方、三角ロジックを用いる中で、根拠と主張を結びつける要素の名称が最適であるのか、疑問が残った。鶴田はこれを「理由」と示しているが、「理由」と「根拠」は、日常生活ではもちろん学習の中でも同義として用いられることが多いため、概念理解の段階で戸惑う生徒が多かった。この実態を感じながらも、本研究では名称の検討まで至らなかったため、今後の視点とし、さらに研究を発展させていく所存である。

**参考文献** 1)文部科学省(平成28年)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)P124」 2)スティーブ・トゥールミン 訳戸田山和久・福澤一吉(2011)『議論の技法』東京図書株式会社 3)鶴田清司(2017)『論理的思考・判断力を育てる三角ロジック』図書文化社 4)鶴田清司・河野順子(2014)『論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン中学校編』明治図書出版社 5)文部科学省(2017)小学校・中学校学習指導要領解説(平成29年告示)国語編